

## 大阪大学大学院学位授与式総長式辞

本日ここに修士／博士の学位を得、授与式を迎えられたみなさんに対し、まずは心よりお祝いを申し上げます。また、幼少の頃からこの日まで、みなさんの勉学を支えてこられたご家族の方々の長きにわたるご苦労に対しても、心より敬意を表したく存じます。

これから企業や行政、あるいは民間の研究所やシンクタンクに活動の場を移される方もおられれば、さらに大学で研究を続けられる方もおられるでしょうが、それぞれに本学で培った知恵と知識と技能を存分に発揮されてゆかれることを、心より願っております。

さて、みなさんは専門的な研究の最初の一つをまとめ、ここに学位を得られました。学術の領域においてプロフェッショナルとしての一步を踏み出されたわけです。

ところで、そもそも学位とはいかなるものでしょうか。学術におけるプロフェッショナルとはどういうひとのことでしょうか。

この夏に遭遇した一つの出来事についてご紹介することから始めたいと思います。いま名古屋では、あいちトリエンナーレ 2010 が開かれています。そのオープニングを飾る作品として、「森の奥」という演劇作品が上演されました。新聞などでも大きく取り上げられましたのでご存じの方もおられることと思いますが、この作品は、ヒトとロボットが共演する世界で初めての演劇です。そしてこのロボット演劇、じつは大阪大学で制作された作品なのです。アフリカの森林のなかにある霊長類の保護と研究のための施設で、ヒトとその同僚として働くロボットとが、サルとヒトとロボットに本質的な違いがあるのか、「理解する」というのはどういふことなみか、「人間」とは何者であるかを議論しようという、ひじょうに哲学的な内容の演劇です。

ロボット工学者として世界的に有名な、基礎工学研究科の石黒浩教授はこれまで、人間科学研究科の認知科学の研究者らと協力しながら、みずから製作した精緻なロボットを媒介として、ヒトの「こころ」と「ふるまい」の研究をしてこられました。そんなある日、わたしは彼に、本学コミュニケーションデザイン・センター教授であり劇作家でもある平田オリザさんを紹介しました。わたくしの想像を超えて意気投合された二人は、やがて、ロボットとヒトが共演する演劇作品をいくつか実験的に作られました。ロボット研究の専門家と、人間の知覚や行動や情動の研究の専門家に、現代演劇の旗手が加わったのです。平田さんから石黒さんが教わったこと、それは、ロボットにヒトに似たふるまいをさせるには、ヒトのすべてのふるまいを模倣させるのではなくて、ふるまいのいくつかのポイントを抽出すべきだということでした。そして、そうしたいくつかのポイントを押さえるだけで、人形を人間以上に人間らしく見せる文楽の技を、人形遣いの桐竹勘十郎さんからもたつぷりと学び、平田さんのシナリオと演出の下、ロボット演劇を完成させていったのです。

現代の先端科学と現代演劇と伝統芸能の素晴らしいコラボレーション、これを実現するには、さらに多くのプロフェッショナルの力が必要でした。ロボットのプログラマー、ロボットを長時間駆動させるためのコンデンサーの技師、そして俳優、プロデューサー、舞台装置や小道具の制作者、さらにはポスター制作者、広報のプロ、予算を組む経理のプロといったひとたちです。それら多数のプロフェッショナルがそれぞれの「持ち場」を、まるでオーケストラのように交響させるなかで、この世界初のロボット演劇は生まれました。

このエピソードは、プロフェッショナルの何かを教えてください。

プロフェッショナルとは、専門の知識や技能をもった職業人のことだと、まずは言えるでしょう。いかえると、プロには「その道一筋」とか「専門を究めているひと」というイメージがともないます。余人がとてもかなわないような特定の「わざ」を身につけているひと、というイメージです。

これ自体はまちがいでありませんが、誤解を生むイメージではあります。というのも、いまお話しした例にあるように、どんなプロフェッショナルも、他のプロ、あるいは他のノン・プロと協同しなければ、何一つ専門家としての仕事をなしえないからです。

情報端末の微細な回路設計を専門とする技術者がいるとします。その彼は、超微細な回路を実現するためには、それを可能にするような材料の専門家と組まねばならない。どんな機能をどんなふうに乗せるかについてシステム設計の専門家と組まねばならない。さらに、それを新製品として実現するためには、さらに別のプロ、たとえば消費者とじかにつながっている営業のプロ、広報のプロ、そしてもちろんコスト計算をしてくれる会計のプロとも組まねばならない。

ここで注意を要するのは、これら協同するプロたちにとって、組む相手はいずれもじぶんの専門領域からすればアマチュアだということです。当然のことですが、じぶんもまた相手からすれば素人にほかならないのです。ある筋のプロは、具体的な事業の場では、部分的な専門家、いかえると「特殊な素人」にほかならないと言ってもいいでしょう。

とすれば、プロというのは、他のプロ—じぶんからすればアマチュア—とうまく共同作業できるひとのことであり、そういう意味でのアマチュアにじぶんがやろうとしていることの大事さを、そしてそれがいかにわくわくするものであるかを、きちんと伝えられるひとであり、そのために他のプロの発言にもきちんと耳を傾けることのできるひとであり、とどのつまりはノン・プロと「いい関係」をもてるひとだということなのです。

専門という、じぶんの蜻壺に閉じこもっているひとは、優れたプロではありません。いやプロの名に値しません。大学院を出て博士号をとっているひとは、専門の研究とはちょっとずれた研究をやってくれと言うと「それはわたしの専門ではありません」とあたりまえのように拒否するとぼやく企業人がよくおられますが、これは正当なぼやきだと思います。一つのことしかできないというのは、ほんとうのプロフェッショナルではない。たんなるスペシャリストにすぎないということです。

先日、ビデオカメラの手振れ補正の技術や、デジタルテレビ放送の基本技術といえる階層型伝送方式で知られるパナソニックの技術顧問の大嶋光昭氏と、お話しする機会がありました。その機会に、企業が真に求める博士課程の人材とはどのようなものかについて質問しました。それに対して大嶋さんは、こんなふうに答えてくださいました。

「新しい分野の研究を始める際には、科学的で理論的なアプローチが不可欠です。わたしの経験でも、博士課程のひとは、論理的に解析を進めたうえで、物理モデルを作成し、あまり実験をすることもなく、見事に問題を解決してくれました。確かにいったん物理モデル等が確立してしまうと、博士課程でない一般研究者でも進められますので、確立した研究テーマにおいては博士課程の人材が不可欠ではありません。実のところこれまでの日本企業には新しい研究に挑戦する機会があまりありませんでした。しかし、日本はいまアジアなどの中進国に追い上げられますので、自然と新しい分野の研究をせざるをえなくなりつつあります。そういう意味で、科学的なアプローチ手法と、広い基礎知識をもつ博士課程の方の需要は今後大きくなると思います」。こんなふうにおっしゃいました。

ポイントは、学術のプロというのは、「分野」のプロなのではなくて、「研究」のプロだということ

にあります。

たしかに、ある分野でのプロには、他のひとたちが気づいていない問題領域で、問題を突き詰めるために、独りもがき、苦しみ、悩みぬいてきたという自負があります。けれどもそうした問題領域でしかその能力が発揮できないというのではなくて、なにかある一つの問題を究めるといふ経験をとことんしてきたことで、問題を究めるといふその仕方あるいはスタイルが身につについて、だから別のどんな問題でも究める用意があるということこそが、真のプロフェッショナルであることの条件なのではないでしょうか。

じぶんにしかできないことを知っているというのは、裏返して言えば、じぶんにはできないことをも明確に知っているということです。そしてじぶんにはできないことを知っている別のひとと協働しないことには、じぶんにしかできないことすらも実現できないことを知っているということです。

このことが意味しているのは、逆説的な言い方になりますが、ある分野の専門研究者が真のプロフェッショナルでありうるためには、つねに同時に「教養人」でなければいけないということです。教養とは、一つの問題に対して必要ないくつもの思考の補助線を立てることができるということです。いいかえると、問題を複眼で見ること、いくつかの異なる視点から問題を照射することができるということです。このことによって、ひとの知性はより客観的なものになります。わたしたちの知性がそのように複眼的になるためには、常日頃から、じぶんの関心とはさしあたって接点のない思考や表現にふれるよう心懸けていなければなりません。じぶんの専門外のことがらにたいしていつも感度のいいアンテナを張っていること、そう、専門外のことがらに対して狩猟民族がもっているような感度の高いアンテナを、いつもじぶんのまわりに張りめぐらせていなければならないということです。要するに、狩猟民族が数キロメートル離れた地点での自然環境の微細な変化に的確に感応するのと同じような仕方、同時代の社会の、微細だけれども根底的な変化を感知するセンスをもつということです。

そういうグッドセンスを、みなさんにはこれから一層磨いてほしいと思います。そうしてこそはじめて、みなさんは、みずからの限られた専門知を広く社会に活かすことができるようになります。じぶんの専門領域に関することがらを、その専門領域を知らないひとたちに、魅力あるものとして語ることもできるようになります。

以上が、今日、プロフェッショナルとしての一步を踏み出されたみなさんに、わたくしがぜひとも伝えたかったことです。

さて、最後になりましたが、みなさんお一人お一人がこれからの長い生涯、健康と幸運に恵まれ、悔いのない人生を送られることを祈りつつ、わたしの式辞といたします。